

JOHA ニュースレター

第31号

日本オーラル・ヒストリー学会第14回大会 (JOHA14) 報告特集

9月3日(土)、4日(日)の2日間、日本オーラル・ヒストリー学会第14回大会 (JOHA14) が、一橋大学国立キャンパスにおいて、開催されました。分科会3つとテーマセッション1つ、そして2つのシンポジウムが開かれ、それぞれにおいて熱い討議が繰り広げられました。

今回のニュースレターでは、会員みなさまに、このJOHA14のご報告をするとともに、来年3月11日のシンポジウム、次回第15回大会等についてお知らせします。第15回大会の日程は2017年9月2日3日、会場は近畿大学(大阪府東大阪市)です。プログラムの詳細は未定ですが、自由報告の分科会も予定しています。また改めてMLや学会HP上での告知・募集をいたします。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会

第14回大会報告・・・・・・・・・・2

1. 大会を終えて
2. 第1分科会
3. 第2分科会
4. 保苅実記念シンポジウム
5. 第3分科会
6. テーマセッション:「満洲の記憶」とオーラルヒストリー
7. シンポジウム 日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦
8. 大会参加記

II. 総会報告・・・・・・・・・・11

- 2015年度事業報告・決算報告・会計監査報告、
2016年度事業報告・予算案ほか

III. 理事会報告・・・・・・・・・・13

1. 第七期第2回理事会(2015年12月13日)
2. 第七期第3回理事会(2016年6月19日)
3. 第七期第4回理事会(2016年9月3日)

IV. お知らせ・・・・・・・・・・19

1. シンポジウム「エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティブをめぐる歴史学と社会学の対話」開催のお知らせ
2. 2017年度大会のテーマ・セッションと共同報告について
3. 『日本オーラル・ヒストリー研究』第13号投稿募集
4. 会員異動
5. 2016年度会費納入のお願い

.....
*ニュースレター掲載のメールアドレスは、(at)部分を@に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第14回大会報告

1. 大会を終えて

JOHA 第14回大会は、2016年9月3日4日、一橋大学で開催されました。二日間で168名の方が受付をされ、延べ200名以上の参加者を迎え、大盛況となりました。本大会はとりわけ非会員の参加が多く、二日間で82名の方にご来場いただきました。3つの分科会で計13本の自由報告、テーマセッション「満州の記憶」とオーラルヒストリー」、保苺実記念シンポジウム「いまあらためて「保苺実の世界」を探る」、シンポジウム「日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦」と盛りだくさんのプログラムで、大変充実した二日間の大会となりました。また会場の佐野書院ロビーでは保苺実写真展もおこないまして、大勢の参加者に観覧いただきました。懇親会にも50名の参加をえて、予想を上回る賑やかさで交流を深めていただきました。開催校として大学院生とともに準備と運営に尽力いたしましたが、行き届かない点があったかもしれません。各会場で活発な議論が交わされたことでオーラルヒストリー研究の進展に寄与できたことが開催校としてまことにありがたいことでした。ご参加いただいたすべてのみなさま、ご協力くださった関係者のみなさまに心より厚くお礼申し上げます。

(第14回大会開催校理事・小林多寿子)

2. 第1分科会

第1分科会では、聞き取りを用いてきた自らの調査研究を振り返り、あらためて聞き取りの意義を考える報告や、東日本大震災における高齢者支援のあり様を聞き取りから検証しようとした報告が行われた。

第1報告の川崎瑞穂（国立音楽大学）「芸能享受心性の合目的性」は、報告者が長年携わってきた秩父市荒川白久の神明社神楽で、毎年4月に秩父市大滝の大達原稲荷神社例大祭で上演される際に、当地の信仰（稲荷信仰）に合わせて狐の演目が必ず上演されてきたことに注目し、芸能自体の目的ではなく、芸能の「享受」にまつわる心性について、オーラル・ヒストリーの課題として検討しようとしたものである。報告では、フランスの哲学者ポール・リクルの解釈学などを参照しつつ、オーラル・ヒストリーに依拠した「芸能享受心性の合目的性に関する解釈学的研究」の必要性を指摘した。

第2報告の小泉優莉菜（神奈川大学）「かくれキリシタン信仰における「伝説」に関する一考察—長崎県を事例として」は、イタリア国立マルチャナ図書館での史料調査と、信者への聞き取り調査から、その伝説の信憑性と、現在のかくれキリシタン信仰における意義について考察したものである。長崎県の「かくれキリシタン信仰」には、真偽性を別として多くの伝説が存在し、現在の信者らはそれらを信仰儀礼の一部として、口伝しつづけている。報告では、江戸期に日本に潜伏した宣教師たちの史料調査をふまえ、伝説の信憑性について検討している。

第3報告の斎藤公子（立教大学）「陸前高田市高田第一中学校避難所で（福祉避難室）はいかにして成立したか—高齢者を支援した被災者たちの語りから」は、東日本大震災により甚大な被害を受けた陸前高田市において、大規模避難所の運営に携わった被災者2名の語りにもとづき、そこでの高齢者支援の内実と困難について詳らかにしたものである。報告では、福祉避難所の一形態とされる「福祉避難室」

が、厚生労働省「福祉避難所設置・運営に関するガイドライン」（2008年）の想定とは異なったプロセスを経て、被災者たちの判断で設置・運営されたことについても明らかにし、災害時要援護者支援における課題を提示した。

第4報告の日野智豪（東京福祉大学）「薬草、ARV、バイアグラ—北部タイ農村における HIV/AIDS の薬剤誌」では、タイ全土で HIV 罹患率の最も高い北部タイ農村における HIV/AIDS 治療について、2004 年から現在まで実施した文化人類学的定着調査（参与観察、アクション・リサーチ、個別の聞き取り）によるデータにもとづいて検討したものである。報告では、薬剤が HIV 感染者の身体に及ぼす影響として、①北部タイの伝統的な薬草の知識、知恵、感染者の生きるための戦略、薬草医のつながり、②薬草と ARV（抗 HIV ウィルス薬）の共存・拮抗関係、③近年、農村に普及したバイアグラと ARV の関係などについて言及した。

（大門正克）

3. 第2分科会

第2分科会では、オーラルヒストリー研究にまつわる調査方法論を論じた5本の報告が行われ、フロアとのあいだで活発なやり取りが行われた。

第1報告の徳安慧一（一橋大学）「調査対象者と同じ属性を有することによる調査の困難」では、中高一貫男子校を卒業した若年男性を対象に行ったインタビュー調査における、調査対象者と研究者の属性の共有がもたらす問題が扱われた。まず報告の主題として、インタビュー中に差別発言、政治的発言、違法行為の告白など研究上首肯しかねるものが出現し、かつそれが対象者と調査者との属性の共通性（という思い込み）に基づくと考えられる場合どうすればよいのか、という問題が設定された。その上で徳安氏は、自身が行った男子校 OB へのインタビューの具体的なトランスクリプトをいくつか提示した。その場面では、語り手が調査者に対して感じる気安さからか、女性に対するセクシズムや同性愛へのホモフォビアをにおわせる発言が飛び出した。また調査後のフィードバックにおいて直面した問題にも言及された。徳安氏はこれらを踏まえ、「マジョリティ研究の困難」として次の3点、すなわち①距離化・客体化の困難、②対象者へのフィードバックの困難、③自身の経験知の扱い方の困難の3点を挙げ、その克服について現時点での考えを表明した。以上の報告に対してフロアから、まだ調査そのもののねらいや意味が報告者自身のなかで整理されていない印象を受けるとの指摘や、こうした研究はまだ若年の年代に属する調査者でなければできない部分もあるから、困難ばかり論じるより、積極的な可能性を探究した方がよいのではないか、といった声が寄せられた。

第2報告の山崎晶子（一橋大学）「海外調査で得られたデータ分析の妥当性」では、「外国人による調査において得られたデータの分析妥当性はいかに担保されるのか」を主題とし、具体的には山崎氏自身がフランスで行った、フランス人エリート形成と言語運用能力獲得をテーマとするインタビュー調査の経験が報告された。この調査では最終的に54名のグランゼコール出身者を対象にインタビューが行われたが、その前段階において①問題関心の的確さ、②質問事項の的確さ、③調査対象設定の的確さ、をそれぞれ確保するために山崎氏がどのような手続きをとったかが報告された。またインタビューが始まってからは、①インタビューで使用する言語の問題、②トランスクリプトのつくり方やフィードバックの仕方、③翻訳の適切さ、④語りの含意など異文化間理解の妥当性、の諸点についてどのように対処し

たのかが述べられた。最後にまとめの部分で、ここまで述べてきたのはいわば「よそ者」ゆえの苦勞に由来するものだが、逆に「よそ者」ゆえに得られる視点やメリットもある点が述べられた。フロアからのコメントでは、報告者が自らの立場を「ライフストーリー研究」と規定することへの疑問が質されたほか、本調査がフランス語での多数のインタビューなどの困難を克服した労作であることへの敬意の表明、またフランスのエリート形成に関しては多くの先行研究が存在するなかで本研究はどのように差異化をはかるのかといった質問がなされ、報告者による応答がなされた。

第3報告の平塚ゆかり（順天堂大学）「日中通訳者のオーラルヒストリーから見る通訳規範意識とその形成要因」では、自身も長年通訳者としてのキャリアを歩んできた平塚氏による、日中通訳者を対象とするオーラルヒストリー研究の報告が行われた。研究の目的が述べられたあと、先行研究への言及において、既存の研究は第一線を退いた通訳者を対象としたものが多く、第一線で現役で活躍する通訳者を扱った研究は稀であることが指摘された。続いて本研究の鍵概念である通訳規範について説明があったのち、中国語母語通訳のA、B、C氏（インタビューは中国語で実施）、日本語母語通訳のD、E、F氏の合計6名の具体的な語りを引用しながら、通訳者が実際の通訳場面で直面するさまざまな状況において、「あくまで言語に忠実に」という狭義の通訳規範が必ずしも適用されず、時に「クライアントに忠実に」という新たな規範が生成することを語った語りが提示された。ただこうした傾向は中国語母語通訳者に見られたのに対し、日本語母語通訳者においては「言語に忠実に」という規範の持続が見られたという指摘は興味深かった。フロアとのやり取りでは、インタビューのトピックが通訳者としての「仕事」のエピソードに集中している観があるが、彼女／彼らがどのような人生を歩み、そのことが語られた通訳としての仕事ぶりどどのように相関しているかが分かるのもっと興味深い研究になるのでは、といったコメントが寄せられ、報告者からは今後そのような方向での分析を検討しているとの応答があった。

第4報告の関根里奈子（一橋大学）「女性研究者が「男性の経験」を語ることの困難」は、女性研究者が男性研究にたずさわろうとするとき、参与観察において「男性文化」になじめず、調査が難航した経験を手がかりにしたものであった。具体的には報告者の関根氏は、男性学の枠組みを援用し、戦闘的な「サバイバルゲーム」に興じる若年男性を対象とした調査を行った。そのなかで最も抵抗感をおぼえたのは、男性たちの相互行為をえがくために、男性が集まりやすい場所に近づこうとしたときだった。たとえば、ゲームをおえた男性が一服する喫煙スペースがあり、そこでの会話は研究にとって重要なデータとなるものだが、男性たちから「副流煙を吸うから出た方がいいよ」と遠回しに外に出ることを促された。また関根氏が男性プレイヤーに交じってゲーム中、やぐらの上に登ろうとすると「女の子はダメ！危ない！」と声をかけられやぐらの下に降ろされた場面が紹介された。また参与観察場面だけでなく、インタビュー場面でも女性との交友関係などを尋ねた際に話題を避けられ、十分に語りを引き出せなかった経験が紹介された。結論部分において、これまで述べてきた困難は、たとえば2番目のエピソードであれば「男性並みに強いプレイヤーになる」ことで克服できる可能性があるとする一方、無理に寄り添おうとするより、むしろ「経験を共有しえない」ことで何が分かるかを探究することに意義があると締めくくった。フロアからは、この研究のリサーチクエスチョンがそもそも何であるのか、またその問いに照らして、フィールドや対象の選定が妥当であったのかといった問いがなされたほか、たとえば喫煙所にカメラを設置して会話を収録し、分析したりすればかなり面白い研究になるのではないか、といったアドバイスがなされた。

第5報告の田中雅一（京都大学）「アウシュヴィッツのガイドたち」は、ポーランドのアウシュヴィッツ収容所跡でツアー客向けガイドを行う人びとを対象とした、いわゆる「ダークツーリズム研究」に位置づけられるものである。田中氏は多くのガイドにインタビューをするなかで、ガイドの感情労働としての側面や二次トラウマの問題といったさまざまな側面を浮き彫りにした。ガイドになった動機として、歴史的使命感を語った人が非常に多かったこと、ツーリストへの態度として「感情を込め」て語る必要を多くの人が指摘し、だからと言ってそれが「演技になってはいけない」と語る人が多かったこと、生存者が訪ねてくることもあり生存者を前にすると声がつまってしまう経験や語った人がいたこと、こうした問題の克服のためそれぞれに日常生活のなかで講じている対処を語っていたこと、などが報告された。フロアからは、訪問客の国籍（たとえばドイツ人か非ドイツ人か）によってガイドの語りには有意な変化はあるのか、またアウシュヴィッツが他の博物館のような録音テープを使わずあくまでガイドによる生の案内にこだわるのはなぜか、といった質問が寄せられた。次のシンポジウムの時間が迫っていたため、十分に質疑応答の時間がとれないのが少し残念であったが、本報告に対するフロアの関心が非常に高いことがうかがえた。

以上、第2分科会での5つの報告は、大変バラエティーに富むものであった半面、互いに緊密に結びつき合い、呼応するものであった。たとえば第1、第3報告は対象者と研究者とが共通する属性をもつ、いわゆる「当事者研究」であったのに対して、第2、第4報告は対象者にとって「よそ者」であることがもつ困難と可能性を問うたものであり、一見正反対の立場に思えながら呼応関係にあるものだった。第5報告の内容は、戦争経験の次世代継承が問題になりつつある日本においても、深く考えさせられるものだった。このように本分科会の内容は、日本におけるオーラルヒストリー研究の深化と多様化をうかがわせるものであり、今後の展開をたのしみにさせる豊かな内容であったと言えよう。

（倉石一郎）

4. 保莉実記念シンポジウム「いまあらためて「保莉実の世界」を探る」

2004年に『ラディカル・オーラル・ヒストリー—オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』をあらわして日本におけるオーラルヒストリー研究の最先端を拓き、私たちに強烈なインパクトを残して逝去された保莉実さんは一橋大学の卒業生です。経済学部で学び、経済学研究科修士課程を修了後、1996年よりオーストラリアへ留学されました。このたび、一橋大学で第14回大会が開催されることになり、没後12年となるいま、保莉実さんの仕事がどのような意味があったのかをあらためて考える「保莉実記念シンポジウム」を開きました。

具体的な企画をしてくださったのは今期の研究活動委員長の蘭信三さんです。報告者は、野上元さん（筑波大学）、八木良広さん（愛媛大学）、松井康浩さん（九州大学）の3人で、それぞれたいへん充実したご報告でした。野上元さんは「歴史が聞こえてくること—方法的ラディカリズムと歴史への愛」というテーマで保莉さんの歴史学への道をたどり、保莉さんの学問形成の基礎となった一橋での学びの詳細をあきらかにしました。野上さんは保莉さんと同期で同じ藤田幸一郎ゼミ（近代ドイツ社会経済史）で学びました。当時のゼミでの購読文献や卒論構想報告レジュメ等の貴重な資料を示しながら、藤田先生や他のゼミの証言をもとに保莉さんがいかにオーストラリアのアボリジニ研究へそして歴史学へ向かっていったのか、そのプロセスを詳細に紹介され、そこに見出される歴史への愛についても語ってい

いただきました。

第二報告者の八木良広さんは、「原爆被害の歴史実践と対話の可能性—保苺実への応答」として、社会学における中野卓の『口述の生活史』を参照しつつ、自身の原爆被害者研究での調査経験のなかからイベント企画をめぐって浮上した「私たち」という主体の形成と歴史叙述のありかたを具体的な調査事例をもとに紹介され、「ギャップ越しのコミュニケーション」という保苺の提起した問いへの応答を示していただきました。

第三報告者の松井康浩さんは、「実証主義とテキスト主義を超えて—歴史研究者は保苺実から何を得たか」というテーマで、保苺さんの本が出版当初、歴史学界でいかに受けとめられ、そして近年、あらたに歴史研究者に影響を与えはじめたのではないかという問いのもとに、歴史学領域における保苺の仕事のとりあげられ方をたんねんに追ひ、保苺の問題提起が最近のエゴドキュメント研究をめぐる動向と関連づけて論じられることを示していただきました。松井さん自身はソ連のスターリン時代に市民が書いた日記や手紙、回想録というエゴドキュメントを用いて当時の人びとの主観的世界や市民の主体性を育む親密圏を描き出す仕事を『スターリニズムの経験—市民の手紙・日記・回想録から』として刊行されています。近年になって歴史学界で保苺の仕事に対する注目が高まり始めて、受容が進んでいることが紹介され、言語論的転回以降の展開状況においてエゴドキュメント研究の議論のなかに保苺の提起したことが深められる可能性があり、保苺の影響が歴史学領域にもじわじわと広がりつつあることがあきらかにされました。

フロアからは鋭い質問が出され、各報告者の応答により熱いやりとりが交わされ、会場は沸きました。最後に清水透先生から、保苺さんが歴史学にこだわっていたこと、そして二人でオーラルヒストリーの共著を出そうと話されていたという最期の様子が紹介され、あらためて若くして逝ったことがほんとうに惜まれる気持ちに包まれました。しかしながら、このシンポジウムは保苺さんが蒔いた種があらたに芽吹く場、そして若い世代にも継承されていく機会になったとおもいます。

「保苺実さんのシンポジウムを一橋で開きたい」という開催校のたつての希望をかなえていただきました。近年の動向とともに刺激的な議論を展開された報告者の方々、満員の会場の聴衆の方々、保苺実さんのご両親様、会場ロビーで同時開催した保苺実写真展「カントリーに呼ばれて—ラディカル・オーラル・ヒストリーとオーストラリア・アボリジニ」にご尽力いただいた「保苺実とつながる会」と北海道立北方博物館、みなさまに心よりお礼申し上げます。

(第14回大会開催校理事・保苺記念シンポジウム司会： 小林多寿子)

5. 第3分科会

第3分科会では、以下の4つの報告がなされた。

第1報告の大島岳(一橋大学)「社会の周縁を調査する上でのリスク評価と回避法確立の重要性」は、フィールドワークで調査者が直面する「リスク」について、先行研究から導かれた課題をふまえ、性的少数者を対象とする自身のフィールドワークの経験から、「リスク」の内容やそれへの対応を考察するとともに方法論的な課題を提示した。質疑では、どのように調査対象者を募ったのかに関連して Red Ribbon Heritage Project の概要や、「リスク」という用語の使用方法について(調査者にとってのリスク、調査対象者の生活上のリスクなど位相の異なるリスクをどう考えるかなど)議論がなされた。

第2報告の田野綾人（立教大学）「「科学」というちっぽけな銃を片手に僕たちは〈語られる人生〉に挑む——犬死しないために、フィルター理論からみるライフストーリー論再考」は、対話的構築主義がはらむ問題について、発達障害者である「私」の立場から考察し、方法的可能性を模索した。質疑では、翻訳者／原作者という定義の確認とそれに主観と客観がどうかかわっているのか、主観と客観は相反するものなのか、個を突き抜けた普遍をどのようにとらえればよいのか、実証主義と構築主義は二項対立的問題に還元できないのではないかなどについて意見が交わされた。

第3報告の猪岡叶英（大阪大学）「1960年代70年代の沖縄をめぐる人類学・民俗学の周辺」は、1960、70年代の沖縄で行われた人類学・民俗学調査・研究に「協力者」としてかかわった経験をもつ女性のライフヒストリーから、「協力者」としての経験がその後の人生に与えた影響を検討したものである。質疑では、沖縄史の文脈と個人のライフヒストリーにはズレがあるのではないか（沖縄史の文脈に還元しすぎではないか）、1960、70年代の沖縄における人類学・民俗学研究の意義を問い直すという課題を想起させるタイトルと報告内容の齟齬などの課題・問題が提起された。また、調査における「協力者」の役割についても意見が交わされた。

第4報告の栗木千恵子（中部大学）「スタッズ・ターケルの作品の意義について」は、ジャーナリストでオーラルヒストリアンでもあるスタッズ・ターケルの作品の意義を、『大恐慌！』（1970年）を中心に、ターケルへの聞き取りなどをふまえて考察したものである。これに対し、真実と事実をターケルはどう使い分けていたのか、ジャーナリズムの「民主化」の意味、当時のジャーナリズムの全体状況のなかでのターケル作品の位置、オーラルヒストリーとしての『大恐慌！』を可能たらしめた社会的・文化的背景などについて質疑応答があった。

（人見佐知子）

6. テーマセッション：「満洲の記憶」とオーラルヒストリー

本セッションでは、満洲引揚者たちの記憶の語りをテーマに3つの発表が行われた。満洲引揚者の語り、戦後日本社会のマスターナラティブやナショナルヒストリーとの相互関係のなかでどのように表象されたのかについて、当事者への聞き取りと回想録、会報などの史料分析を通して実証的に考察された。本セッションでは、これまであまり顧みられてこなかった会社員や学生などの都市生活者や軍人（満洲国軍）に焦点があてられた。

第1報告「帰国邦人団体の会報からみる戦後日本の満洲記憶：安東会会報『ありなれ』の分析を中心に」菅野智博（一橋大学）では、満洲引揚者の記憶形成と「場所」の関係に注目した報告がなされた。満洲引揚者の記憶形成において、どこの場所から引揚げたかという問題は極めて大きく作用する。加えて、戦後社会再編のなかでその場所がどのような地政学的な意味を持つかによっても、その記憶は変容する。菅野報告では、安東という満洲と朝鮮の境界に位置する都市に注目し、安東からの引揚者の記憶が、戦後日中関係のみならず朝鮮半島情勢とも関係しながら多層的に構築される過程が考察された。

第2報告「満洲国軍陸軍軍官学校の朝鮮人：「日系」として入校した唯一の朝鮮人・金光植の語りから」飯倉江里衣（東京外国語大学）では、満洲国軍という旧日本軍や関東軍と異なる満洲国の正規軍の記憶を取り上げた。飯倉報告では、多民族で構成された満洲国軍のエスニシティに注目しながら、朝鮮人エリート青年の矛盾した二つの満洲記憶について検証された。

第3報告「満鉄留魂碑建立をめぐる紛糾と満鉄魂の顕彰について」湯川真樹江（学習院大学）では、元満鉄社員たちによる記念碑建立を事例に、戦後日本社会における満鉄の記憶をめぐる葛藤について考察された。満鉄社員たちの記憶形成は、「侵略の尖兵およびその子弟」というマスターナラティブとの葛藤をはらみ続け、二世たちにも大きく影響するものであった。湯川報告では、1970年代の「記念碑建立ブーム」のさなかに沸き起こった「満鉄留魂碑」の建立過程に注目しながら、記憶のコメモレーションのかたちについて考察された。

なお、本セッションに登壇された3名は、「満洲の記憶」研究会という若手研究組織のメンバーであり、満洲関係者へのインタビューや会報、回想録など関連史資料の収集・整理などの活動を行っている。オンラインジャーナルであるニューズレター『満洲の記憶』を刊行するなど、積極的な情報発信も行っている。

- ・ニューズレター『満洲の記憶』 <http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095>
- ・ブログ <http://manshunokioku.blog.fc2.com/>
- ・Facebook <https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>

（佐藤量）

7. シンポジウム「日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦」

今年度の大会シンポジウムは、「日本軍『慰安婦』問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦」と題して、山下英愛氏（文京女子大学）・岡田泰平氏（静岡大学）・木下直子氏（日本学術振興会特別研究員・大阪大学）の報告と、佐藤文香氏（一橋大学）・成田龍一氏（日本女子大学）によるコメントがなされた。

本シンポの企画意図として、冒頭、山本めゆ氏（日本学術振興会特別研究員・津田塾大学）が、日本におけるオーラル・ヒストリー研究は、アジア・太平洋戦争や「大日本帝国」の植民地をめぐる体験への聞き取りの蓄積としては豊かなものがある一方、本学会も含めて十分向き合っていない問題に、日本軍「慰安婦」問題があるとした。1990年代初めの韓国の「慰安婦」の名乗り出以来、日韓両政府の対応の紆余曲折や、国内の歴史修正主義的な「慰安婦」否定言説の拡がりなど、四半世紀を経てこの問題は深刻さを増している現状を踏まえ、「証言」の持つリアリティを大事にしてきたオーラル・ヒストリー研究の学知こそがこのような状況を拓く可能性をもつとし、本シンポのねらいを述べた。

山下報告は、韓国での「慰安婦」聞き取り作業が「訊く」から「聴く」へと変化する過程を追い、「証言集」作成に携わった女性たちが、「慰安婦という経験」は解釈者の視線にかかっていることに自覚的であったことを描き出した。同時期、日本においても、聞き取りにおける対話的構築性や非言語的表現をめぐる、オーラル・ヒストリー研究者が格闘していたことと重なる興味深い報告であった。山下報告では、このような聞き取り活動の深化が「慰安婦」支援運動に十分反映されていないと指摘し、今後の課題とした。

岡田報告は、フィリピン・セブ島における日本軍の性暴力事件をBC級裁判資料から追ったものである。フィリピンでは「慰安婦」概念に、「慰安所」の女性から、拉致・監禁されてレイプされた女性まで幅広い認識があったが、裁判で調査・記録の対象になったのは「慰安所の外」の性暴力事件だけであったとした。裁判の過程で、「慰安所」は性暴力と認識されず、したがって記録にも残らなかった、と

して、「記憶と記録」の持つ問題性を詳細な裁判資料から明らかにした。

木下報告は、日本軍「慰安婦」問題のなかで、不可視化されてきた日本人「慰安婦」、城田すず子さんの残したエゴ・ドキュメントを詳細に検証した。城田のテキストからは、日本の〈国民〉であることで〈被害者〉になる回路が存在しなかったこと、日本人「慰安婦」の場合は国家とともに家族や共同体も性的搾取を行う加害集団になることが特徴的であるとした。その後、社会学の立場から佐藤コメント、歴史学の立場から成田コメントがなされ、会場との質疑応答は時間をオーバーして活発になされた。今回、JOHA 大会シンポとしては「戦争と性暴力」に関する初めての試みであり、これを今後の一歩としたい。

(平井和子)

8. 大会参加記

*今回は、2名の会員の方に JOHA14 の参加記を作成していただきました。

○第 14 回大会参加記

日本学術振興会特別研究員 清水美里

JOHA の大会は数年ぶりでした。変わらず活気あふれ、研究の多様性とラディカルぶりを感じ大いに刺激を受けました。これは私の領域によるためかもしれませんが、この学会は院生・若手研究者の参加率が比較的高い気がしています。またメディア関係者や市民運動での聞き取りに携わる方々も一定数参加されていて、象牙の塔ではない独特の雰囲気居心地のよさを感じています。さらに今大会の二つのシンポジウムは、これまでの JOHA の歩みを回顧させるようなテーマであったように思いました。

初日の保苺実氏の記念シンポジウムは、氏の研究の既存の学問に対する挑戦的姿勢を再認識させられるとともに、途中、氏の個人資料や氏との記憶の語りが出出し「保苺実」をオーラル・ヒストリーするような空間になっていたのではないのでしょうか。松井康浩先生のご報告で、歴史研究で氏の研究が徐々に用いられるようになってきたことを知りうれしく思いました。そして、着実に氏の研究が読み継がれていくことのみならず、氏の研究の魅力ゆえの危険性にまで議論が及んだことは刮目すべきではないのでしょうか。

二日目のシンポジウムのテーマは日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦でした。本年は〈慰安婦〉をテーマにした学会やシンポジウムが複数あり、こちらはある種の緊張感のなかで議論が行われていたと思います。JOHA にとって戦争体験と女性史（あえてジェンダーではなく女性と述べます）は多く扱われてきたテーマであり、この両者が交差する日本軍「慰安婦」についても度々言及はされていたと思います。私が最初に参加した約十年前の大会では、フロアとの質疑応答の中で慰安所の語りがこぼれ出たことがありました。その JOHA で満を持しての本テーマだったのではないのでしょうか。

さらに、今大会ではエゴドキュメントの痕跡から浮かび上がる人間関係の生々しさに息をのむ一瞬が何度もありました。加えて、オーラル・ヒストリーがただ「聞きたいことを聞く」のではなく、「聞いたことから考える」ことで可能性が生まれ、それが更なる進化を遂げていく過程に出会うことができました。

JOHA ならではの多元性と盛り沢山の企画の数々、裏方の方々のご尽力がしのべれます。

今後、JOHA がどのような化学反応を引き起こしていくのか非常に楽しみです。

○情熱の感染する場所

立命館大学大学院 青木秀光

日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA）という場所は、正に私の「居場所」や「出発点」と呼べるようなそんな学会です。ここでは、大学院修士時代に初めて発表をさせていただいた場所でもあります。当時、緊張してガチガチになりながらも多くの有益なコメントをいただいたのを覚えています。そこで感じたことは、一番に「あったかいなあ」という思いでした。他の学会で、あるような殺伐さを感じなかったのがとても不思議で居心地が良かったのです。それから幾度も、JOHA での発表や、懇親会、査読誌でのやり取りを通じて、多くのものを得ました。

今年の第 14 回大会は、はじめて、発表もなしに聴講のために参加しました。それは、現在、私が研究している「統合失調症の子を抱える親のライフストーリー」というテーマをより深く、広く探求するためのヒントをもらうための参加でした。具体的には、これまで 7 年以上もの間、日本の特定地域の親たちのライフストーリーを聴き取るなかで、海外での親支援というものとの乖離を強く感じるようになってきたからです。ライフストーリーの聴き取りだけにとどめず、それらを親たちの支援というものに結び付けていくためには、海外での先進的な実践や、その歴史、そして現地で起こっていることを調査することは必要不可欠です。

実際に、海外調査とはいかなることなのかを考えたくて、2 つの報告に特に着目しました。1 つ目は、第 2 分科会での山崎晶子さんによる「海外調査で得られたデータ分析の妥当性」です。ここでは、日本語からフランス語への翻訳という作業や、日仏それぞれの背景文化の違う者同士のインタビューがいかに研究として、「妥当な分析」と言われるようになるのか、報告者の経験が詳しく語られました。2 つ目は、今大会の目玉企画とも言える「保刈記念シンポジウム——いまあらためて『保刈実の世界』を探る」です。ここでは、生前の保刈さんとも親交の深かった先生方をも交えて、保刈実さんの残された研究実践をより新たに振り返るというものでした。

さて、端的に以上の報告から私が感じたものは研究に対する、そして目の前の他者を知りたいという飽くなき探求心です。それらは、情熱とも言えるかも知れません。報告を聞いたその日、宿泊先のホテルで、私は思わず「自分の道を迷わず進もう」と夜中に 1 人でつぶやいていました。興奮して一睡もできない自分がいました。周囲からの「まだ、博論まとめないの？」、「業績は、いくつ？」という声が文字通りアホらしく思えたのです。ここでは、報告の細かい内容は述べません。しかし、JOHA 報告の熱量はやはりただものではなく、見事に私に感染しました。私も微力ながらではありますが、血の通った、地道で誠実な研究実践を展開していきたい所存です。

Ⅱ．総会報告

2016年度総会（第14回総会）

日時：2016年9月4日（日）12：05～13：00

場所：一橋大学 如水会百年記念インテリジェントホール

会長挨拶、議長選出の後、以下の議案が諮られた。

第1号議案 2015年度事業報告

2015年度（2015.9.1～2016.8.31）事業報告について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員数の現状

前回学会以降、2016年3月末までの新規入会者は12名（一般6名、学生他6名）。2年間の学会費未納による自動退会者、自己申告退会もあった。4月以降の入会は、15名（一般7名、学生他8名）あった。8月31日現在の会員は255名である。これは昨年同時期と比べ10名増加である。

2. 第13回大会（JOHA13）の実施と第14回大会（JOHA14）の開催

第13回大会は、2015年9月12～13日の二日間にわたって大東文化会館（東京都板橋区）で開催した。自由報告は4つの分科会に分かれ、18本が報告され。大会初日には、研究実践交流会「新自由主義の時代と文化を描くー若者研究の実践から」を、大会二日目には、シンポジウム「多文化共生とオーラルヒストリーの力」を開催した。開催校によると2日間でおおよそ100名以上が参加。盛況であった。

第14回大会は、2016年9月3～4日の二日間、一橋大学佐野書院（東京都国立市：開催校一橋大学）で開催する。

3. シンポジウムの開催

2016年3月19日に慶応大学三田キャンパスにおいて、シンポジウム「歴史と記憶のオーラル・ヒストリー」を、日本オーラル・ヒストリー学会／慶應義塾福澤研究センター／三田社会学会との共催で行った。

4. 学会誌11号の発行と12号の編集・発行

2015年9月に学会誌第11号を発行し、学会大会時に会費納入済会員の参加者へ配布し、不参加者や後日納入者にはインターブックス社から配送した。12号の編集作業は順調に進み、例年通りの発行を予定している。会費納入済会員の第14回大会参加者には会場で、不参加者および会費未納者は納入確認後、インターブックス社より配送を予定している。

5. ニュースレターの発行

ニュースレターは第13回大会後、第14回大会の間に、29号（2015年12月28日）と30号（2016年7月30日）を発行した。広報委員2名が編集分担した。会員メーリングリストでの配信を基本とし、郵送会員若干名には、事務局から郵送した。

6. ウェブサイトの充実

ウェブサイト（<http://joha.jp/>）を学会事務局と広報委員会が管理運営している。

7. 会員相互の交流の促進

会員メーリングリストを通じた会員相互の情報発信が適宜なされている。

8. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が 2016 年度に終了となることに対して、本学会では、J-STAGE へ参加をすることとした。現在移行作業中である。

第 2 号議案 2015 年度決算報告

2015 年度 (2015.4.1~2016.3.31) 決算報告資料に基づき報告され、了承された。

第 3 号議案 2015 年度会計監査報告

塚田守監事と小倉康嗣監事より「会計帳簿、預貯金通帳、関係書類一切につき監査しましたところ、正確で適切であることを認めましたので、ここに報告いたします」と報告があり、了承された。

第 4 号議案 2016 年度事業案

2016 年度(2016.9.1~2017.8.31)事業案について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員の拡大と維持

年次大会やシンポジウムなどの実施を確実にを行い、これらの情報を広報することで、本学会の周知に努め、会員数の拡大を目指す。会員の維持と会費収入確保のため、大会後、年内を目途に郵送による入金状況確認を行い、会費納入の督促を行うと同時に未納退会者を防ぐようにする。

2. 第 14 回 (JOHA14) 大会の実施と第 15 回大会 (JOHA15) の準備

第 14 回大会を 2016 年 9 月 3~4 日の二日間にわたって一橋大学佐野書院 (東京都国立市: 開催校一橋大学) において開催する。自由報告は 4 つの分科会に分かれ、16 本の報告を予定している。本年度はシンポジウムとして「保苺実記念シンポジウム—いまあらためて「保苺実の世界」を探る」(9 月 3 日開催)、「日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦」(9 月 4 日開催)を予定。広報活動として学会 HP に掲載し、学会理事を中心に広報に努めている。来年度の第 15 回大会については 2017 年秋に二日間、近畿大学 (大阪府東大阪市) での開催を予定。

3. 学会誌第 13 号の発行

学会誌第 13 号は、第 7 期理事会の編集委員会によって、JOHA14 のシンポジウムと自由投稿をもとにして編集する方針である。本年度も電子メール添付での応募を可能にする方針である。

4. 研究会・ワークショップの開催

研究会・ワークショップは、2017 年 3 月に「エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティブをめぐる歴史学と社会学の対話」を実施予定。

5. ニュースレターの発行

JOHA14 後に大会報告を中心にしたニュースレター第 31 号を、JOHA15 前に大会プログラムを中心とした第 32 号の発行を予定している。

6. ウェブ情報の充実と改善

学会ホームページをさらに見やすく整備するとともに、適宜更新していく。

7. 会員相互の交流促進

学会 HP や会員メーリングリストの活用、ニュースレター配信を通じて、会員相互の交流を促進する。

また、会員の出版、活動情報についても学会誌での書評等を通じて積極的に共有する。

8. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流

理事および関心ある会員を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行う。

9. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が2016年度に終了となるため、J-STAGEへの移行作業を速やかに完了させる。

第5号議案 2015年度予算案

2016年度（2016.4.1～2017.3.31）の予算案資料に基づき提案され、了承された。

追加議案 会則改正

学会会則第4章、第8条に関して下記のように変更することを提案し、承認された。

（旧） 本会の事務局は、会員が所属する機関におく。

（新） 本会の事務局は、会員が所属する機関におく。なお、郵便振替口座の管理は会計担当におく。

（第七期事務局長 佐々木てる）

Ⅲ. 理事会報告

1. 第七期第二回理事会 議事録

日時：2015年12月13日（日）10時～13時

場所：上智大学

出席者：有末賢、佐々木てる、赤嶺淳、岩崎美智子、山田富秋、八木良広、桜井厚、

小林多寿子、蘭信三、大門正克、人見佐知子、佐藤量（順不同）

欠席者：好井裕明、平井和子、中村英代

議事録：蘭信三

1. 自己紹介

2. 編集委員会報告

赤嶺委員長より報告があり、以下のように審議を行った。

- ・投稿用アドレスの追加について報告、説明があった。
- ・作業案・同日程案について、3月末投稿締め切りから8月までの作業スケジュールについて詳細な報告があり、承認された。査読は、原則として編集委員会内で行うが、研究の守備範囲から理事会メンバーにお願いすることもあること、査読期間を短縮して、投稿者の修正作業時間を十分取るようにしたことが提案され、承認された。

- ・特集の新着状況について、大会シンポジウムの特集は二本とし、すでにコーディネータに依頼しており 5 月連休明けに原稿を受け取る予定であることが報告され、承認された。なお、来年度は大会シンポジウムが複数予定されており、特集については編集委員会と研究活動委員会の連携が密に行われる必要性がのべられ、研究活動委員会からも了解の旨の発言があった。
- ・J-STAGE への移行について、理事会承認済みであるがまだ具体的には動いていないこと、来年の年明けにはインターブックスとの打ち合わせを始める予定であることが報告され、承認された。購読料が見込めなくなるので、その分の会員増を目指したい旨報告された。

3. 研究活動委員会報告

蘭委員長より報告があり、以下のように審議を行った。

- ・2016 年度大会は一橋大学（小林多寿子大会委員長）での開催が決定しているが、2017 年度は近畿大学（上田貴子会員が大会委員長予定）での開催が提案され、承認された。
- ・第 7 期は「共通課題：歴史研究にとってのオーラルヒストリー」とすることが承認されているが、各シンポジウム等の冠にすべて付すことが提案され、承認された。
- ・第 7 期のシンポジウム・ワークショップ案が提案され、細部は今後の検討が必要だが、それは各コーディネータに任せられ、大枠としては承認された。
 - 1) 2016 年 3 月 19 日「歴史と記憶とオーラルヒストリー（仮題）」（有末担当・於慶応大）JOHA と慶應義塾大学との主催・共催について議論された、両方の主催となった。
 - 2) 2016 年 9 月 3 日 4 日大会時のシンポジウム案
 - 「保莉実のラディカル・オーラル・ヒストリー」（蘭・八木担当）
 - *同時に保莉実写真展を検討したい旨が小林大会委員長より提案された。
 - 「戦争と性暴力（or 戦時下の性暴力）」（平井・山本めゆ会員担当）
 - 「満洲の記憶とオーラルヒストリー」（佐藤担当）*テーマセッションの予定
 - 3) 2017 年 3 月「災害とオーラルヒストリー」（大門・他の会員担当予定・於上智大）。
 - 上記課題が難しい場合は、「戦争体験とオーラルヒストリー」を次案とする。
 - 4) 2017 年 9 月大会時「歴史研究にとってのオーラルヒストリー原論」（蘭担当）
 - 「インタビューから探る子ども時代の戦争体験ー心理学・歴史学の共同研究（甲南大プロジェクト）の可能性」（人見担当）。次案に「オーラルヒストリーとアーカイヴ」。
- ・大会の会場設定について、小林大会委員長より、大講義室 2 室、小講義室 2 室を予約していることが報告された。蘭委員長より自由報告申し込等に関する具体的スケジュール案を検討する旨報告された。自由報告の締め切りはが 5 月 15 日の予定。
- ・佐藤量理事を研究活動委員会幹事に選任したい旨提案され、了承された。

4. 広報委員会報告

八木委員長より以下のような報告があり、質疑が交わされた。

- ・『ニューズレター』29 号の準備、学会 HP の手直しも行っていることが報告された。

5. 会計報告

会計担当の中村理事欠席のため、佐々木事務局長より報告があり、質疑が交わされた。

- ・学会の所在地は都合から会計の住所にしており、中村理事の住所を事務局の所在地とすることが事後報告され、承認された。

- ・理事会などの出張費への支払いについて説明があり、質疑が交わされた。従来は、旅費については大体必要経費の半額援助を行っていること、関東の場合は旅費支給をしないことがほぼ慣行となっていたことが説明され、次回改めて審議されることとなった。

6. 事務局報告（入退会他）

- ・新入会員が 5 名あり、入会が承認された。もう一人入会希望が出ていることが報告され、入会が承認された。3 名の退会希望があり、会費の納入後に大会を認めることが承認された。

7. その他

- ・有末会長から、選挙管理規定の見直しが必要であることが説明された。
- ・有末会長から、定例理事会の日程について 12 月、6 月、9 月が提案され、承認された。
- ・次回理事会：2016 年 6 月 19 日午後 14 時～17 時、上智大学 2 号館。
編集委員会・研究活動委員会：同日午前 10 時半～13 時、上智大学 2 号館。

2. 第七期第三回理事会 議事録

日時：2016 年 6 月 19 日 14:00～17:00

場所：上智大学 2 号館 6 階 615a 室

出席者：有末賢、佐々木てる、中村英代、小林多寿子、佐藤量、山田富秋、赤嶺淳、蘭信三、好井裕明、
大門正克、人見佐知子、平井和子（順不同）

欠席者：桜井厚、八木良広、岩崎美智子

議事録作成者：山田富秋

1. 議事録確認

確認できた。

2. 会長より；理事選挙規定の改正

会長より、選挙規程の 3 の被選挙権者から、重任理事だけでなく、会長経験者も除いてはどうかと提案があった。その際に、必要な時は、推薦理事として挙げてもらえれば問題ないという補足があった。審議の結果、小規模の学会であるということを勘案し、会長経験者を除く条項については、新たに付け加えないことにした。選挙規程については、現状のまま。

3. 編集委員会

(1) 学会誌について

論文 8 本、研究ノート 3 本、書評 2 本で最終となった。昨年度の学会シンポジウムは掲載する。学会ワークショップについては、原稿締切まで何の反応もなく、残念だが、ワークショップ原稿は掲載しない。広告掲載依頼については、理事会で分担して依頼することにした。今回の編集作業を振り返って、気づいた点を次回以降の改善点としたい。まず、図版を 400 字としてカウントし、著作権の処理を投稿時点に終了しておくこと。査読コメントに対する修正点のリプライを義務化すること。

(2) J-Stage への移行について

佐々木てる事務局長にお願いして、移行手続きを行っている。CiNii の方へ移行するという回答をした。移行手続きの実際については、インターブックスにお願いしたい。一冊単位のアップという形

式を進める。

4. 研究活動委員会

- ・自由報告 3 分科会、テーマセッション 1 部会、1 日目午後が保苺記念シンポジウム、2 日目午後は、戦争性被害問題のシンポジウムという構成案である。テーマセッションは「満州の記憶とオーラル・ヒストリー」、戦争性被害問題は、日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦というタイトルである。
- ・この 3 つの企画を来年度の学会誌に掲載するかどうか。日本軍「慰安婦」については掲載できる可能性が高い。勉誠出版『アジア遊学』に掲載しても良いかもしれない。テーマセッションは、学会誌掲載を前提にして実施する予定なので、掲載は確実である。
- ・分科会の司会は、実施した部会の内容についてニューズレターに要約して書くことにする。
- ・一橋大学で開催することになったので、大学院生がボランティアに学会運営を支援するとともに、知的貢献もしたいので、学会発表もすることになった。結果として 5 人が「調査過程で出会う困難」という共通テーマで自発的に発表を申し込んだ。審議の結果、この 5 人の発表する分科会構成については、研究活動委員会原案の通りとした。当初の発表タイトルについては、再考を求めることにした。
- ・研究活動委員会からは、今後は公募制のパネルなどを設ければ、こうした連続した発表を一括して一分科会に収めることも可能になるかもしれないということが付言された。
- ・テーマセッションの登壇者には、学会大会までに学会員になってもらうようお願いする。非会員の登壇者については、謝金を一万円、交通費は規定に従って支払うことにする。
- ・大会実行委員長の小林多寿子理事から、大会会場について現状報告があった。学会大会については東 2 号館を予定している。大学院との共催であれば、部屋の貸出料は無料になる。佐野書院はすてきな建物なので、一日目の保苺記念シンポジウムと写真展、その後の懇親会をそこで開きたい。

5. 会計

(1) 会則の変更について

「郵便振替口座の管理は会計担当におく」という文を第 8 条事務局のところに追加する。

(2) 2015 年度会計報告

- ・別紙にもとづいて報告した。今年度は、学会大会の登壇者謝金と旅費を大会運営費の中に別立てにして項目を立てる必要がある。
- ・理事会出席の旅費については、2016 年度は支払うという基本方針を確認した。支出基準は、都内の場合は支給しないこと、また、旅費を申請しない理事については支給しない。今年度の旅費概算については、これから概算を出すことにした。
- ・来年度から CiNii 終了のため、著作権料は収入が入らなくなる予定。

6. 理事会開催予定について

会長から、6 月、9 月、12 月または 1 月というサイクルにしてはどうかという提案があった。冬の企画として、保苺記念シンポジウム登壇者の松井康浩さん、長谷川孝彦（北大）に登壇してもらい、言語論的転回移行の文字資料（エゴ・ドキュメント）をどう捉えるのか論じたい。ヨーロッパ歴史学では、文字資料の評価がなされている。こうした市民の手紙、日記、回想録などに着目して、オーラル・ヒストリーと比較して論じたい。なお実施は 2017 年 3 月を予定。経費に関しては資料代として会員 500 円、

非会員 1000 円を徴収する方針。

6. 広報委員会

NL30 号の編集を準備中。担当は桜井理事。近く個別に原稿依頼がいく予定。

7. 事務局

(1)中国から依頼されている派遣については、日程調整がうまくいかないのでは、今回はお断りする。11 月の 12~13 日の予定。テーマは、教育におけるオーラル・ヒストリーの意義。

(2)入退会者

確認された。

(3)献本の扱いについて

献本については編集委員会で書評対象とするかどうか審議する。

3. 第七期第三回理事会 議事録

日時：2016 年 9 月 3 日（土）11:00-12:00

場所：一橋大学佐野書院 ダイニングルーム

出席者：有末賢、佐々木てる、中村英代、小林多寿子、佐藤量、山田富秋、赤嶺淳、蘭信三、好井裕明、
大門正克、人見佐知子、平井和子、八木良広、岩崎美智子

欠席者：桜井厚

議事録作成者：八木良広

1. 編集委員会

・学会誌の価格

学会誌価格に関する提案があった。学会誌は現在、インターブックス社から一冊 1600 円×300 部を買
い取っている。ただ、この 1600 円という価格は 200 ページを想定しているため、300 ページ前後のペ
ージ数が続くと厳しい。ページ数を減らすか、ページ数をある程度確保するために価格をあげるか、
いずれかの対応が求められる。結果、価格をあげることになり、次の理事会で具体的な金額が提案さ
れることになった。

補足事項として、学会誌の売り上げは現在ほとんどないため、Jstage 移行により無料で論文が提供
されるようになって、売り上げにはあまり影響はない。学会誌は定期刊行物扱いであるため数年は
固定価格での販売が求められる。

・学会誌の在庫処分について

学会誌のバックナンバーに関して、本年度の大会での販売価格についての提案があり、「500 円（以
上）」での販売と決まった。

・J-Stage への移行について

J-Stage への移行にあたり、現況の報告と今後議論すべき内容が示された。現況として、J-Stage へ
の移行はインターブックス社が実施すること、移行料金は特に発生しないこと（学会誌の価格値上げ
優先）、そして Nacsis から J-Stage への移行は今年の秋以降に正式に行われることが確認された。

今後議論すべき内容としては、サイトにアップする論文は（検索可能な）テキスト形式、あるいは画像形式にするか、サイトにあげる時期は学会誌の発行後どの程度の期間を経てからか、である。

・次号（13号）の特集について

次号は、保苅記念シンポジウムと「満洲の記憶」とオーラルヒストリーを、特集として掲載することになった。

2. 研究活動委員会

・2017年3月のシンポジウムについて

シンポジウム「エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティブをめぐる歴史学と社会学の対話」（仮）の開催が提案された。エゴ・ドキュメント論を展開している長谷川貴彦氏を招く予定で、既に内諾を得ている。報告者としては、もう一人社会学のオーラルヒストリー研究者に登壇してもらう予定である。司会は大門理事。日時は来年3月11日午後、場所は上智大学。

・メディアへの対応について

今大会のシンポジウムを取材するメディア記者に対して、誓約書に署名してもらうことになった。社会新報、朝日新聞、東京新聞が取材予定である。事務局が対応する。誓約書の項目については別紙参照。

・2017年度大会のシンポジウム案

2つのシンポジウムが提案された。一つ目は、戦争と子どもに関わる研究についてで、人見理事担当。二つ目は、オーラル・アーカイヴをテーマとしたもので、現時点では本決まりではない。開催校の上田貴子氏担当である。

*来年度大会（近畿大学）の日程に関して。2017年9月2、3日。

・大会時における「共同報告」について

来年度、会員から「共同報告」（テーマセッション）を公募にかけることになった。今大会会員からの提案を形にできなかったことの反省を踏まえている。公募を出す時期は、一般報告の応募よりも早い時期にする。今後具体的な時期や、公募型の「共同報告」を学会誌に掲載するかどうかについても、検討していく。

3. 会計

・修正後の2016年度予算案について

前回の理事会で報告された2016年度予算案の修正点が報告された。

・理事会旅費補助について

理事会開催時の理事の旅費扱いについて、今年度は、申請のあった理事を対象に往復交通費の半額のみ支給であることが確認された。

4. 広報委員会

・7月末にニューズレター30号（JOHA14大会プログラム特集号）が発行された。

・12月に次号（31号）の発行を予定している。今大会の報告を掲載する。近く個別に正式な原稿依頼を行う予定である。

5. 事務局

・会員より、博士論文に学会誌掲載論文の使用許可を求める連絡があった。これまで似たような問い合わせはなかったが、今後も同様の連絡が来ることも考え、適切に対処するための書類を作成すること

になった。

- ・ 前回の理事会以降で、7名の新規入会の申し込みがあり、正式に会員として受理された。
- ・ 今大会の総会で、平成29年度日本学術振興会科学研究費、特設分野に「オラリティと社会」が新しく設定されたこと、JOHA会員からの応募を求めることを、追加で報告することになった。

IV. お知らせ

1. シンポジウム「エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティヴをめぐる歴史学と社会学の対話」開催のお知らせ

■趣旨

欧米の歴史学の最新の動向を積極的に紹介してきた長谷川貴彦氏によれば、言語論的転回後の欧米の歴史学では、「物語」の復権と「主体」の復権が試みられてきた（長谷川貴彦『現代的史学への展望』岩波書店、2016年）。「主体」の復権の中心的な概念は「経験」と「実践」である。「経験」は、意味を積極的に創出する過程として、また世界を構造化する過程としてとらえられ、「実践」は、スクリプト（台本・脚本）とパフォーマンス（演技）の二つの領域から構成されているとする。ここでの「主体」は、個人の解放を意味しているわけではないが、構造主義的な決定論からは決別し、状況への対応や対応過程における意味の創出に注目することで、主体の動機づけや行動様式に関心が集まるようになってきた。

「主体」の復権とかかわって注目されているのが「パーソナル・ナラティヴ」論である。「パーソナル・ナラティヴ」は、オーラル・ヒストリーの中心的なテーマであり、オーラル・ヒストリーを通じて個人史の研究が蓄積されてきた。それに対して、言語論的転回後の欧米の歴史学で注目されているのが、エゴ・ドキュメントと呼ばれる一人称で書かれた史料である。自叙伝や日記、書簡などを対象にして、近代から近世、中世にまで至るエゴ・ドキュメントの研究が産出されている。史料の「形式」や「言葉遣い」、「慣習」「プロット」などに関心を寄せるなかで、女性の語りや貧民の語り、奴隷の語りなど、主に民衆の歴史を、エゴ・ドキュメントを通じた文字史料による「パーソナル・ナラティヴ」研究として進展させている。

このエゴ・ドキュメントにいち早く注目し、紹介するとともに、自らの歴史研究の一環に組み込んできた長谷川貴彦氏（北海道大学）をお招きし、「エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティヴをめぐる歴史学と社会学の対話」のシンポジウムを開催することで、今次の研究活動の共通テーマである「歴史研究にとってのオーラル・ヒストリー」の議論をさらに展開させてみたい。

シンポジウムでは、長谷川貴彦氏と朴沙羅氏（神戸大学、社会学／移民研究・レイシズム研究）に報告をお願いし、好井裕明氏（日本大学、社会学）にコメントをお願いした。朴氏は、オーラル・ヒストリーの研究史整理を通じて方法に対する問題提起を重ねるとともに、他方では、占領期の「密航」を通じて「朝鮮人」と「不法入国」の定義を検証することで、境界をめぐる考察を重ねている。好井氏は、社会学の分野で、一貫してオーラル・ヒストリーについて発言し続けてきている。歴史学／歴史社会学／社会学の対話を通じて、エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティヴをめぐる議論を発展させたい。

■日時 2017年3月11日(土) 13時30分～17時30分

■場所 上智大学(東京) 2号館5階508室

■主催 日本オーラル・ヒストリー学会

■登壇者

○報告者 長谷川貴彦氏

歴史学におけるエゴ・ドキュメントの動向を紹介するとともに、歴史学の側から、社会学のオーラル・ヒストリー研究にコメントをお願いしたい

○報告者 朴沙羅氏

ご自身が口述資料を得てきた経験を紹介していただきたい。そのうえで、社会学によるオーラル・ヒストリー研究にみられたパーソナル・ナラティブ論について言及するとともに、歴史社会学の側から、歴史学のエゴ・ドキュメント論にコメントをお願いしたい

○コメンテーター 好井裕明氏

社会学の分野から2人の報告にコメントをお願いしたい

○司会 大門正克

■参考文献

長谷川貴彦『現代歴史学への展望』岩波書店、2016年

長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント論」『歴史評論』第777号、2015年1月

朴沙羅「『お前は誰だ!』——占領期における「朝鮮人」と「不法入国」の定義をめぐって」『社会学評論』第64巻2号、2013年

朴沙羅「物語から歴史へ——社会学的オーラルヒストリー研究の試み」『ソシオロジ』第56巻1号、2011年

好井裕明「被差別の文化・反差別の生きざま」からライフストーリーへ」山田富秋・好井裕明編『語りが拓く地平』せりか書房、2013年

好井裕明「差別と和解するとはどういうことなのだろうか」『日本オーラル・ヒストリー研究』第5号、2009年

(大門正克)

2. 2017年度大会のテーマ・セッションと共同報告について

次大会ではテーマ・セッションを若干公募いたします。テーマのみの応募か、テーマと報告者も揃えた、いわゆるパネルを組んでの応募かは未定ですが、追ってメーリングリストで詳細をお知らせいたします。1分科会での共同報告を希望する場合は、テーマ・セッションとして応募してください。それ以外は、すべて個人報告とみなし、採択も、部会の構成も研究活動委員会の責任の下で行います。テーマ・セッション、個人報告への皆様の積極的な応募をお待ちしております。

(研究活動委員長 蘭信三)

3. 『日本オーラル・ヒストリー研究』 第13号 原稿募集

論文、研究ノート、聞き書き資料、書評、書籍紹介の原稿を募集いたします。投稿希望者は『日本オーラル・ヒストリー研究』第12号の投稿規定・執筆要項を参照の上、以下の編集委員会メールアドレスまで原稿を送付ください。図版の著作権をはじめ、図版の文字換算など、前号からの修正点が多々ありますので、ご注意ください。

○提出原稿は、査読審査を経たのち、6月中旬ごろに掲載の可否が決定します。

○前号より原稿の提出は、メールで添付することとなりました。以下のアドレスに送付ください。学会大会で発表されたみなさんをはじめ、会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。投稿に関し、質問があれば、お気軽に以下の問い合わせ先にお訊ねください。

○募集期間：2017年3月20日～31日（厳守は従来通りですが、メールによる事故を防ぐため、今回は提出期間を設けます。ご協力ください）。

○問合せ・応募原稿送付先：joha_journal (at) ml.rikkyo.ac.jp

(編集委員長 赤嶺淳)

4. 会員異動 (2016年7月1日～11月30日)

(1) 新入会員 (入会申し込み順)

澁谷知美	東京経済大学 現代法学部
伊藤みちる	大妻女子大学 国際センター
飯倉江里衣	東京外国語大学大学院 総合国際研究科 博士後期課程
菅野智博	一橋大学 大学院社会学研究科 博士後期課程
田坂讓	有限会社 コミュニティプラザ
上田貴子	近畿大学 文芸学部
土方直子	兵庫大学 現代ビジネス学部 現代ビジネス学科
工藤由美	国立民族学博物館 外来研究員
永易三和	一橋大学大学院 言語社会研究科 修士課程
吉池毅志	大阪人間科学大学 人間科学部 社会福祉学科
飯塚彬	法政大学大学院 人文科学研究科 史学専攻 博士後期課程
佐藤智美	拓殖大学 大学院
岡田泰平	静岡大学 情報学部
片平深雪	兵庫丹波の森協会
水本浩典	神戸学院大学 人文学部
中平遥香	神戸学院大学 人間文化研究科 地域文化論専攻
森川洋子	明治大学大学院 教養デザイン研究科 博士後期課程

(2) 退会者

なし

※連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

（事務局長 佐々木てる）

5. 2016 年度（2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日）会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。

本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のごほうじょをお願いいたします。

会費は 8 月末日までのご納入していただきたい旨、お願いしておりましたが、まだ未納の会員さまがいらっしゃいます。学会誌は一斉発送の時期を過ぎておりますので、ご納入確認がとれた後に、個別にお送りさせていただきます。

また、一部ですが 2015 年度分、2014 年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちらも早めのご納入をよろしくをお願いいたします。

■年会費

一般会員：5000 円 学生・その他会員：3000 円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキョウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：(受取人名)：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて、個別に領収書も発行させていただいておりますので、その際にご連絡下さい。その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の中村 (hideyonm (at) gmail.com) までお問い合わせください。

(会計 中村英代)

.....

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニューズレター第31号

2016年12月24日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒030-0196 青森市大字合子沢字山崎153-4

青森公立大学 佐々木てる研究室

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

電話 (Fax) : 017-764-1570

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp
